



平成 23 年度

第 5 回子ども虐待防止オレンジリボンたすきリレー
実施報告書

子ども虐待防止オレンジリボンたすきリレー実行委員会

目次

I. 子ども虐待防止とオレンジリボン.....	1
II. 子ども虐待防止オレンジリボンたすきリレー事業の概要.....	4
III. 第5回子ども虐待防止オレンジリボンたすきリレー実施報告.....	5
1. 全コース図.....	5
2. ランナーの職種と人数.....	5
3. 各区のたすきリレーと啓発活動.....	6
(1) 都心コース.....	6
(2) 鎌倉・三浦コース.....	9
(3) 湘南コース.....	10
(4) ゴール.....	12
4. 山下公園のイベント.....	14
5. 祈りの Friendship キルト製作プロジェクト.....	15
IV. オレンジリボンたすきリレーを振り返って.....	16
1. 東日本大震災.....	16
2. 鎌倉の大仏からのリレー.....	16
3. 鎌倉・三浦コースの新設.....	17
4. 多領域に広がる参加の輪.....	19
5. 思いの込められたたすきのリレー.....	20
6. 感動のゴールと全国に広がるたすきの輪.....	20
謝辞.....	21

I. 子ども虐待防止とオレンジリボン

2000年に「児童虐待防止法」が施行され、児童虐待の定義、虐待防止のための国や地方自治体の責務、虐待を受けた子どもの保護のための措置などが定められた。法施行後、児童虐待防止に向けた様々な取組みが行政レベルや民間レベルで活発化している。厚生労働省は2001年に「虐待防止対策室」を設置し、1990年代に相次いで立ち上がった民間の児童虐待防止団体は、2004年に全国組織として「児童虐待防止全国ネットワーク」を設立した。国は2002年から児童虐待防止啓発のポスターを毎年製作するようになり、2004年から11月を「児童虐待防止推進月間」として、民官問わず啓発や防止活動を積極的に行うよう呼び掛けるようになった。

法制定以降、様々な取組が行われているにもかかわらず、残念なことに児童相談所の児童虐待の対応件数は減少していない。1990年に統計を取り始めてから、一度も前年度を下回ったことはなく、2010年度には55,154件を数え、この数字は90年の1101件の約47倍にも昇るのである(図1)。こうした増加の背景には、児童虐待事件が絶えず報道され一般市民からの通報が増えたり、子ども虐待に対する積極的な介入が潜在していたケースを掘り起こしたりという側面もあるが、様々な子ども虐待防止の取組が十分に反映していないことも否めない。また、子ども虐待による死亡事例については、2004年には53事例(58人死亡)だったのが、2008年には107事例(128人)と増加の一途をたどっていた。2009年には77事例(88人)と前年より減ったが尊い命が保護者からの虐待によって奪われていることを想像するだけで心が痛む。第7次報告(2009年)の死亡事例では0日・0か月児の死亡事例についてさらに検証されており、妊娠期、さらにそれ以前からの虐待予防に力をいれることが必要であると検証委員会も報告している(表1)。さらに、何らかの理由により保護者と暮らせない社会的養護のもとにいる子どもは約4万7千人いるのである(表2)。

- 全国の児童相談所における児童虐待に関する相談対応件数は、児童虐待防止法施行前の平成11年度に比べ、平成22年度(※)においては4.7倍に増加。(※ 平成22年度は、宮城県、福島県、仙台市を除いて集計した)

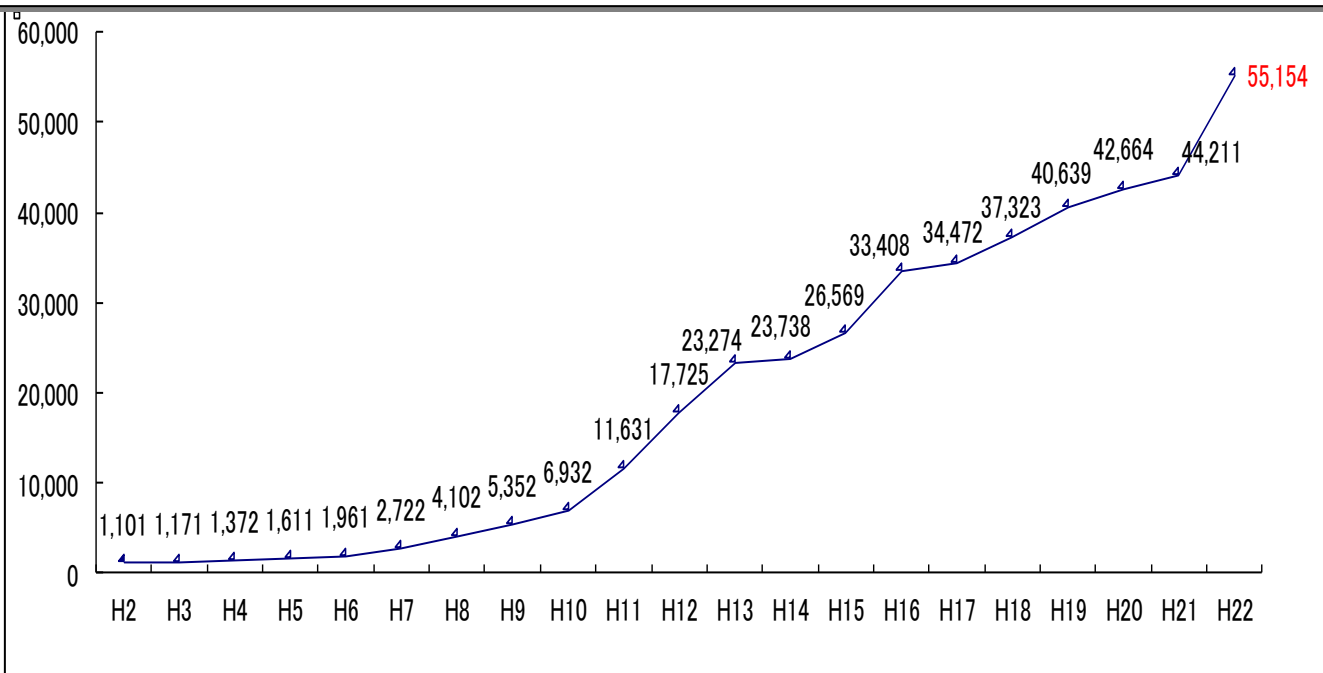


図1.児童相談所における児童虐待相談に関する対応件数

表1. 第1次報告から第6次報告までの子ども虐待による死亡事例等の推移

	第1次報告 (H15.7.1~H15.12.31)			第2次報告 (H16.1.1~H16.12.31)			第3次報告 (H17.1.1~H17.12.31)			第4次報告 (H18.1.1~H18.12.31)			第5次報告 (H19.1.1~H20.3.31)			第6次報告 (H20.4.1~H21.3.31)			第7次報告 (H21.4.1~H22.3.31)		
	虐待死	心中	計	虐待死	心中	計	虐待死	心中	計	虐待死	心中	計	虐待死	心中	計	虐待死	心中	計	虐待死	心中	計
例数	24	—	24	48	5	53	51	19	70	52	48	100	73	42	115	64	43	107	47	30	77
人数	25	—	25	50	8	58	56	30	86	61	65	126	78	64	142	67	61	128	49	39	88

表2. 社会的養護の現状について

里親	家庭における養育を里親に委託	登録里親数	委託里親数	委託児童数	ファミリーホーム	養育者の住居において家庭的養護を行う(定員5~6名)
区分	養育里親	7,185人	2,837人	3,836人		
(里親は重複登録有り)	専門里親	5,842人	2,298人	3,028人	ホーム数	49か所
	養子希望里親	548人	133人	140人		
	親族里親	1,428人	176人	159人	委託児童数	219人
		342人	341人	509人		

施設	乳児院	児童養護施設	情緒障害児短期治療施設	児童自立支援施設	母子生活支援施設	自立援助ホーム
対象児童	乳児(特に必要な場合は、幼児を含む)	保護者のない児童、虐待されている児童その他環境上養護を要する児童(特に必要な場合は、乳児を含む)	軽度の情緒障害を有する児童	不良行為をなし、又はなすおそれのある児童及び家庭環境その他の環境上の理由により生活指導等を要する児童	配偶者のない女子又はこれに準ずる事情にある女子及びその者の監護すべき児童	義務教育を終了した児童であって、児童養護施設等を退所した児童等
施設数	124か所	575か所	33か所	58か所	272か所	59か所
定員	3,794人	34,569人	1,539人	4,043人	5,430世帯	399人
現員	2,968人	30,594人	1,111人	1,545人	4,002世帯 児童5,897人	283人
職員総数	3,861人	14,892人	831人	1,894人	1,995人	256人

小規模グループケア	458か所
地域小規模児童養護施設	190か所

資料：福祉行政報告例（平成22年3月末現在）

※職員数は、社会福祉施設等調査報告（平成20年10月1日現在）

※児童自立支援施設は、国立2施設を含む（家庭福祉課調）

※自立援助ホームは、家庭福祉課調（施設数は平成22年3月末現在、その他は同年3月1日現在）

※小規模グループケア、地域小規模児童養護施設は家庭福祉課調(平成22年3月末現在)

子ども虐待防止に向けた活動の中の一つに「オレンジリボンキャンペーン」がある。これは、2004年に栃木県小山市で二人の幼い兄弟が虐待の末亡くなる事件が起き、その事件をきっかけに子ども虐待防止を目指した小山市の「カンガルーOYAMA」が、2005年に一市民団体の活動として始めたものである。その後、NPO法人「里親子支援のアン基金プロジェクト」協力のもと継続され、さらに、先述の「児童虐待防止全国ネットワーク」が賛同し厚生労働省との協働により全国的な活動を展開、2006年の啓発ポスターにはオレンジリボンが明記されるに至っている。その他、オレンジリボンキャンペーン活動として、各地域で講演会やチャリティーコンサートを行ったり、手作りのオレンジリボンを配布する活動を行ったりなど、様々に展開している。このオレンジという色は、里子たちが選んだ色であるとのことで、子ども虐待のない社会を祈って選ばれたのだろう。

オレンジリボン活動が幅広く行われているが、これらは子ども虐待のない社会を目指して行われているのである。

Ⅱ. 子ども虐待防止オレンジリボンたすきリレー事業の概要

「子ども虐待防止オレンジリボンたすきリレー」事業は、子ども虐待防止啓発活動を目的に、オレンジ色のたすきをリレーでつなぐ活動を実施する事業である。

子ども虐待防止は、多くの機関・分野の方々の協働と、市民の方々の理解と協力が不可欠である。子ども虐待防止の象徴であるオレンジリボンをたすきに仕立て、これをリレーすることにより、子ども虐待防止への市民の関心を高めることと、機関・分野協働の大切さを訴えるものである。また、毎年、たすきリレーのゴールとなる会場や、他キャンペーン会場では、子ども虐待防止をアピールするちらしや手作りのオレンジリボンを配布するなどキャンペーン活動を行う。

本事業は平成19年に立ち上がり、11月23日～24日の2日間かけて、第1回子ども虐待防止オレンジリボンたすきリレーを開催した。また、11月24日には、横浜市のみなとみらい地区の日本丸メモリアルパーク、読売新聞本社前におけるキャンペーン活動を行った。

続いて、平成20年11月9日（日）には第2回子ども虐待防止オレンジリボンたすきリレーを開催した。湘南コース、都心コースに分かれ、グランモール公園（横浜市）にゴールし、ゴール会場では啓発活動も行った。

第3回は、平成21年11月8日（日）に開催し、前回に続き湘南・都心コースに分かれ実施した。同日開催であった湘南国際マラソンとたすきリレーの湘南1区はコースを重ね、そして日本丸メモリアルパークにゴールした。第3回はゴール会場だけでなく東京タワーにおいても啓発活動を行い、少しずつ活動が広がってきていることを実感した回であった。

第4回は、横浜においてAPEC開催時期と重なったことから、平成22年10月31日（日）に開催し、湘南・都心コースに分かれてオレンジのたすきをつないだ。都心コースは渋谷ハチ公からスタートし、ハチ公銅像にオレンジたすきをかけてキャンペーンを行った。また、横浜市中区にある山下公園がゴール会場となり、会場では舞台やブースを設けて啓発活動を行い、一般の観光客にも子ども虐待防止の大切さを訴えた。

本事業の実行委員会は、子どもの虹情報研修センター、日本子ども総合研究所、NPO法人虹のリボン事務局が事務局となり、委員会は社会福祉協議会、児童福祉施設、児童相談所など有志のメンバーで構成されている。

Ⅲ. 第5回子ども虐待防止オレンジリボンたすきリレー実施報告

1. 全コース図



2. ランナーの職種と人数

職種	都心	鎌倉・三浦	湘南	合計
児童福祉施設	13	19	36	68
児童相談所	44	9	17	70
グループホーム・里親	5	1	2	8
子ども家庭支援センター	7			7
福祉一般	11	2		13
教育	1	3	35	39
行政		25	6	31
医療			3	3
企業	20	4	2	26
学生		9	5	14
その他	2	20	42	64
合計	103	92	148	343

3. 各区のたすきリレーと啓発活動

(1) 都心コース

区	ルート	時 間	ランナー数
スタート 渋谷 第1区	渋谷駅ハチ公前 ～日本子ども家庭総合研究所 (4km)	9 : 30	11 名
麻布中継点 第2区	日本子ども家庭総合研究所 ～東京タワー (3km)	10 : 15	11 名
東京タワー中継点 第3区	東京タワー ～泉岳寺 (4km)	10 : 50	10 名
品川第1中継点 第4区	泉岳寺 ～品川児童相談所 (2.5 km)	11 : 20	15 名
品川第2中継点 第5区	品川児童相談所 ～大田区大森スポーツセンター (4.3 km)	11 : 40	11 名
大田中継点 第6区	大田区大森スポーツセンター ～川崎市役所 (6.7 km)	12 : 10	14 名
川崎中継点 第7区	川崎市役所 ～セブンイレブン浦島町店 (8.2 km)	13 : 10	14 名
鶴見中継点 第8区	セブンイレブン浦島町店 ～山下公園 (6km)	14 : 20	17 名
ゴール	山下公園	15 : 20	(計 103名)



都心コースの
ランナーたち





ハチ公を囲んで

渋谷区子ども家庭部長
児玉史郎氏
渋谷区長
桑原敏武氏

東京都福祉保健局少子社会
対策部長 桃原慎一郎氏
渋谷道玄坂商店街振興組合
理事長 大西賢治氏

オレンジたすきが凛々しいハチ公！



ランナーサポートカーも啓発に参戦！！



ランナーも一緒に！



「青ガエル」内でも啓発展示



車内でポスター展示や啓発グッズを配布



「渋谷マークシティ 4F クリエーションしゅや」展示風景



渋谷駅前六差路交差点で、東京都と渋谷区が、協働啓発キャンペーンを行いました。



インターネットTV「原宿畑」で、山下さんが出演。啓発活動を行いました。

(2) 鎌倉・三浦コース

区	ルート	時 間	ランナー数
スタート 高德院 第1区	高德院（鎌倉大仏） ～鶴岡八幡宮（4.2 km）	8：00	16名
鶴岡八幡宮中継点 第2区	鶴岡八幡宮 ～逗子市役所（5 km）	9：00	14名
逗子中継点 第3区	逗子市役所 ～横須賀中央駅前広場（13 km）	9：40	19名
横須賀中継点 第4区	横須賀中央駅前広場～ 関東学院大学（8.5km）	11：15	12名
六浦中継点 第5区	関東学院大学 ～セブンイレブン横浜片吹店（4 km）	12：30	11名
片吹中継点 第6区	セブンイレブン横浜片吹店 ～横浜市中央児童相談所（11km）	13：15	9名
横浜中継点 第7区	横浜市中央児童相談所 ～山下公園（4.2 km）	14：35	11名
ゴール	山下公園	15：20	（計 92名）

鎌倉・三浦コースを走るランナーたち



鶴岡八幡宮・復活の大銀杏の前で



鎌倉・段葛





鎌倉・高德院（鎌倉大仏）境内で、たすきりレーと鎌倉市が協働啓発活動を行いました。



横須賀市も協働啓発活動に参加、エイサーの勇壮な舞も、ひと役担いました。



関東学院大学学園祭でも、啓発活動を行いました。



(3) 湘南コース

区	ルート	時 間	ランナー数
スタート 二宮 第1区	心泉学園 ～エリザベスサンダースホーム (5.7 km)	8 : 20	29 名
大磯中継点 第2区	エリザベスサンダースホーム ～平塚市総合公園 (5.5 km)	9 : 10	10 名
平塚中継点 第3区	平塚市総合公園 ～平塚市総合公園 (2 km)	10 : 00	41 名
平塚中継点 第4区	平塚市総合公園 ～セブンイレブンサザンビーチ店 (7.5km)	10 : 20	6 名
茅ヶ崎第1中継点 第5区	セブンイレブンサザンビーチ店 ～茅ヶ崎ファーム (3.6 km)	11 : 10	13 名
茅ヶ崎第2中継点 第6区	茅ヶ崎ファーム ～遊行寺 (6 km)	11 : 40	9 名
藤沢中継点 第7区	遊行寺 ～西横浜国際総合病院 (5 km)	12 : 20	12 名
戸塚中継点 第8区	西横浜国際総合病院 ～横浜市立永野小学校 (7.5km)	13 : 00	10 名
上永谷中継点 第9区	横浜市立永野小学校 ～山下公園 (11 km)	13 : 50	18 名
ゴール	山下公園	15 : 20	(計 148 名)
総ランナー数			合計 343 名

※複数区を走行したランナーはそれぞれ1名としてカウントしました



湘南コースを走るランナーたち



福祉フェスティバル
福祉フェスティバル



平塚市総合公園内グラウンドで開催された「福祉フェスティバル」で、平塚市と協働啓発活動を行いました。



横浜市立永野小学校グラウンド・地区運動会で、地域とたすきリレーの協働啓発活動を行いました。



(4) ゴール



4. 山下公園のイベント

時間	内容
司会	島田薫・永井美佐江
10:00	幸保エバーグリーンズブラスバンド
11:15	甲州戦記サクライザー イベント
11:50	成田 圭さん ライブ
12:45	パネルディスカッション
13:20	HIP HOP ダンス
13:20	くりちゃんと仲間たち大道芸
14:20	土田 聡子さん ライブ
15:20	ゴールセレモニー

ブース出展一覧
神奈川県 神奈川県保険医協会 おおいそ学園
全国児童家庭支援センター協議会
資生堂社会福祉事業財団
横浜市青少年子ども局
特定非営利法人子どもセンターてんぼ
NPO 法人 CROP.
カンガルーOYAMA
神奈川県母子生活支援施設協議会
セブンイレブン
祈りの「Friendship」キルトたすき

作成頂いたリボンの総数 22,400 個



ステージでは歌やイベントで、盛り上がりました！



さまざまな団体がブースを出展してくれました！

5. 祈りの Friendship キルト製作プロジェクト

東日本大震災 復興サポート

祈りの
Friendship-Quilt を
つくろう!



ここに(白いところ)あなたのmessageを書いて下さい。

参加費(寄付)100円～

このキルトは、数センチから16M～17Mの「たすき」に仕上げます。
参加費(寄付)は、一部被災地の施設に寄付します。
費解、宜しくご参加下さい。
子ども虐待防止ボランティアネットワーク実行委員会

東日本大震災の復興サポートとして、
新たなプロジェクトが開設されました。

鎌倉の大仏様にかかる位の大きなたすきを
(16m～17m)キルト仕立てで、
作ろうというものです。

復興への祈りのメッセージを、たくさんの
皆さんに書いていただきました。



東京タワー会場



鎌倉高德院境内 (鎌倉大仏) 会場



横浜・山下公園Goal 会場



尚、3会場で行った1年目の募金は、28,618円集まりました。
この寄付金は、日本赤十字社などを通じて被災地の皆さまへ届けられます。
皆様のご協力に感謝いたします。

IV. オレンジリボンたすきリレーを振り返って

実行委員長 増沢 高

子ども虐待防止オレンジリボンたすきリレー実行委員会より、今回の東日本大震災で亡くなられた方々、被害にあわれた方々のご冥福と少しでも早い回復をお祈りいたします。また救助活動をはじめ、復興に向けてご尽力された方々、今もなおその渦中におられる方々への心からの感謝と激励を申し上げます。

1. 東日本大震災

未曾有の大地震が東日本を襲ったのは3月11日でした。ちょうど5回目のたすきリレーに向けての具体的な検討に入った中でのことでした。東京と神奈川県も大きく揺れました。その後の1か月は、関東でも計画停電が続き、飲料水の購入や給油が困難になるなど、不安定な日々が続きました。「もうたすきリレーどころではない」という思いが日を追うごとに大きくなりました。衝撃的で想像を絶する事態は、社会の様々な営みを自粛ムードに向けました。様々な機関の年間スケジュールから年度末と次年度の企画が消えていきました。ところが1か月を過ぎた頃から全体のムードが変わってきました。この1か月は被災の影響から少しずつでも回復していくという流れとは全く逆で、その甚大さと復興に向けた道のりの遠いことを、日を追うごとに自覚せざるを得ない1か月でした。ところがその一方で新たな機運が起きてきました。それは、このまま全てが足踏みしていたのでは、かえって未来は遠く、前を向いて進もう、動ける機関や人は、やるべきことはやって行こうというものです。この思いは、被災地である東北の人たちがより強かったと聞きます。実行委員会でも、実施の有無を検討しましたが、ほとんどの委員が実施に賛成でした。むしろ、子ども虐待防止と子どもの明るい未来創出を目的としたたすきリレーに、震災からの復興と被災した日本の子どもたち（私たちは東北の子どもたちは当然のこと、全ての日本の子どもたちが被災したと思っています）の未来を祈る企画を組み入れるべきという声が強かったのです。こうしてたすきリレーは実施に向けて再び動き出しました。そして未来を祈る企画として誕生したのが「祈りの『Friendship』キルトたすき」の製作です。7センチ四方の布ピースにメッセージを書いてもらい、1枚60cm×120cmのキルトを作り、それをつなげて16m位までの、大きなたすきを作ろうというものです。一人100円でメッセージを書き、集まったお金は義援金として被災者に送られます。大きなたすきを製作することの背景には、かの有名な鎌倉の大仏の存在がありました。

2. 鎌倉の大仏からのリレー

昨年の話になります。第4回目のたすきリレーを終えたばかりの12月。鎌倉児童ホームを通じて、鎌倉市とたすきリレーを通した児童虐待啓発の協働に関して話し合いがもたれました。当日は鎌倉市役所にお伺いし、松尾鎌倉市長をはじめ、市役所の職員の方々と直接お話をさせていただき、もし可能であればという前提で、鎌倉市にある大仏をスタートとし、逗子、横須賀を巡る三浦半島のコースの設置を提案しました。恐れ多い提案であることは自覚していました。一笑に付されて終わっても不思議ではないのですが、話し合いでは「夢ではあるが全く可能性がないわけではない」と前向きなムードで、実現に向けて協力していく方向が確認されました。とはいっても鎌倉の大仏

スタートは簡単ではありません。直後の実行委員会では、委員のほとんどは叶わぬ夢としました。国宝であり、世界的に有名な鎌倉の大仏です。相手が名実ともに大きすぎます。この夢の実現の立ちはだかる壁は実際の大仏よりも大きく感じられました。様々な方々に相談、ご協力もいただき、とにかく一度だけでも話を聞いていただけたらありがたいと大仏のある高德院に打診しました。ところが想像に反して、すぐに話しを聞いていただけたのです。当日は私と佐々木副委員長の二人が予定よりもかなり早い時間に高德院に趣きました。まずは大仏に手を合わせ、住職とお会いできることを感謝いたしました。その後境内を歩いていると、ふと大仏横の回廊内壁にかけられた大きな草鞋が目に入りました。その大きさに大仏のものであることはすぐに分かります。そこに書かれていた説明では、長さ 1.8m、幅 0.9m、重量 45 kgもあるそうです。茨城県の常陸太田市の子どもたちが、戦後間もない 1951 年に「大仏様に日本中を行脚し、万民を幸せにさせていただきたい」と願って作り始めたそうで、以降数年に一度、子どもたちが製作し奉納を続けているそうです。常陸太田市は茨城県の北東日に位置し、今回の震災でも大きな影響を受けたに違いない場所です。私たちは、災害からの復興支援と大仏がつながった感覚を覚えました。その理由のもう一つに、大仏の津波災害にまつわる有名な話があります。大仏はもともと大仏殿内に納められていたのですが、500 年前の明応 7 年に起きた巨大地震により発生した津波が、大仏殿まで到達し仏殿を流してしまっただけです。つまり大仏は津波に負けずに座し続けた被災仏なのです。私たちは、戦後の子どもたちと同じように、子どもたちの未来を大仏に祈りたい気持ちで一杯になりました。「祈りの『Friendship』キルトたすき」は、つまり大仏にかけていただくたすきなのです。実はこのことは鎌倉スタートの話が出た時から胸に秘めていたことでした。もちろん実際に大仏にかけていただくわけにはいきません。しかし大きな草鞋を見た時に、完成した暁には草鞋と同じように回廊壁に奉納できたらと、夢のようなことを思ったのです。

佐藤住職は優しく私たちを出迎えてくれました。じつと私たちの話を聞いてくださった後、今度は佐藤住職が子どもの健全な育成に対する思いを静かに語ってくださいました。それをお伺いして、ご多忙にもかかわらず私たちとお会いしていただいた理由が少しわかった気がしました。佐藤住職は、子どもたちの様々な活動、育成プログラムを実施している NPO 法人「鎌倉てらこや」の顧問でもあり、子どもたちの幸せと明るい未来を人一倍願う方であったのです。我々の稚拙な説明に熱心に耳を傾けていただき、そういう趣旨ならと、大仏からスタートすることを了解されたのです。そして「祈りの『Friendship』キルトたすき」の製作と回廊内壁の掲示についても承諾してくださったのです。話し合いの後は、夢にも昇るような気持ちで、伺った二人はしばし放心状態でした。改めて大仏に手を合わせ、感謝とこれからの成功を祈念いたしました。

3. 鎌倉・三浦コースの新設

こうして鎌倉・三浦コース新設の現実化へ向けて走り始めました。実は三浦地域で新コースの設立を求める声は以前からありました。これは昨年 9 月にまでさかのぼります。4 回目のたすきリレーに向けてその準備も佳境に入っていた時のことです。ある研修会で、鎌倉・三浦地域児童相談所の寺田所長が、「三浦地域でもたすきリレーのコースを作りたいけど。いいかなあ」と声をかけて来られました。それはとてもうれしい提案だったのですが、一方でこれまでの 2 コースでもかなり手一杯だったため、困惑したのも事実です。ただ「みんなの負担にならないように、任せてくれた

らこちらで動くから」と言うて下さいました。そこで、さすがに2か月後の実施は無理でも、翌年に向けて検討することになったのです。ですから、鎌倉スタートの話があった時には、すぐに寺田所長のことが頭に浮かび、市役所での話し合いの結果や高德院での朗報を、一早く寺田所長にお伝えしたのです。寺田所長は、満を持したようにコース設定に向けて動き始めました。第1の中継点として鶴岡八幡宮太鼓橋が決まった後は、第3中継所に逗子市役所、第4中継所は横須賀中央駅前広場と決まっていきました。横須賀中央駅前広場は横須賀市児童相談所が中心に設定し、大規模なキャンペーンが繰り上げられることとなりました。児童虐待対応において、県の児童相談所と市区町村との連携は重要ですが、全国的には課題が多いのも事実で、時に起こる虐待死亡事件の背景に二者間の連携の問題が指摘されることがあります。ぎくしゃくがあればこうしたイベントにも表れるものです。スムーズな運びの背景には、鎌倉三浦地域の連携の質の良さがあるのだと思います。このことは神奈川県在住の一市民である筆者にとってはとても嬉しいことなのです。児童相談所は激務です。そんな中万難を排して尽力された寺田所長には本当に頭が下がります。また寺田所長は何も話されませんが、行政職の方がこうした活動に積極的に参加することに対して、いろいろな風当たりがないわけではないと推察します。子ども虐待対応には多分野協働が基本とされながら専門別や縦割りによる壁がそれを妨げます。システムや考え方を突破しなくては進めない課題が山積みで、特に行政機関ではなおのことと思います。たすきリレーは、こうした突破を目指してはじめられた経緯があります。こうした趣旨も理解され主体的に動いていただいた寺田所長には感謝の気持ちで一杯です。第5中継所は関東学院大学と決まり、当日行われる大学祭のメインステージ上でのリレーが実現することとなりました。この実現に取り組まれたのは、横浜市のファミリーグループホームである斎藤ホームの斎藤さんです。斎藤さんは湘南コースのランナー役員として毎年最終区を束ねている方です。関東学院大学の非常勤講師も務めている関係から学生と協力し、大学祭とのコラボが実現したのです。第6中継所はセブンイレブン横浜片吹店と決まりました。寺田所長が頻りに利用するコンビニで、直接交渉して実現しました。コンビニエンスストアがたすきリレーの中継所に入ることは、委員会の希望でした。コンビニエンスストアには虐待を受けて居場所のない子どもや放置された子どもが向かいやすい店でもあり、そうした子どもたちにとっては砂漠のオアシス的な存在なのでしょう。昨年横浜で不幸な事件がありました。コンビニエンスストアでおにぎりとパンを万引きした少年に、店主と警察官が対応したところ、体中に痣があり、虐待を受けていることが分かり、親が逮捕されたのです。食事が与えられず、空腹の限界からのコンビニエンスストアでの万引でした。ちょうど夏休み前の短縮授業期間で給食がなかったことも原因かもしれません。男児の万引きはSOSのサインでもあり、コンビニエンスストアが救済の場となったのです。こうしたことは全国のコンビニエンスストアでも少なからず起きていると思います。カンヌ映画祭で主演男優賞を受賞した映画「誰も知らない」でもコンビニエンスストアに向かう子どもの姿が描かれています。その後神奈川県がセブンイレブン本社と交渉され、セブンイレブンの協賛が決まり、ランナー全員に飲料水とカロリーメイトが渡されることとなりました。さらに湘南コースと都心コースにも1か所ずつセブンイレブンが中継所として加わることとなりました。最後の中継所は横浜市中央児童相談所と決まりました。横浜市は毎年ゴール会場で子どもの遊び場などのイベントブースを出していましたが、中継所としては初参加です。中継後には伊勢佐木町モールもコースに加わり、ゴールまでの最終区間が華やかなものとなりました。鎌倉・三浦コース新設にあたって、重要な立

役者がもう二人います。鎌倉児童ホームの秦園長と指導員である川島さんです。鎌倉スタートを事前に調整していたのも、彼と秦園長でした。川島さんはこれまで湘南コースのランナー役員をされており、鎌倉からのコースを願う一人でした。今回は鎌倉・三浦コースの全てのランナー役員を束ねる責任者です。彼の走力は相当なもので、神奈川県の子童福祉施設のマラソン大会では、子どもに交じっていつも先頭を元気に走っています。今回は鎌倉・三浦コースの全区を走り、全体を監督することとなりました。また秦園長と川島さんはじめ鎌倉児童ホームの職員は、常日頃から地域の様々な機関や人たちと交流を深めています。今回のイベントでも、そうしたつながりある機関や企業に声をかけられました。その結果新たにいくつもの後援団体が加わることとなりました。その中には鎌倉の神社等の庭園を手掛ける彩樹園や、鎌倉に行けば必ず目に留まる人力車を運営する鎌倉力車株式会社プラネスなどがあります。

4. 多領域に広がる参加の輪

児童福祉施設職員が中心に始まったたすきリレーですが、5回目を迎えてこれに関わる方々の実に多領域に渡るようになりました。各コースの中継点では、施設、児童相談所、市役所、小学校、大学、神社、公園、病院、コンビニエンスストア、東京タワー、スポーツセンターなど実に多彩です。その中で湘南コースでは、平塚の総合公園内に第3区のコースを設け、視覚障害者と子ども達等も参加できるようにしたのです。この企画は平塚市社会福祉協議会の遠藤さんの発案です。実はこの企画が動き始めたのも昨年になります。市民マラソン大会等に視覚障害の方が参加できるよう伴走のボランティアをしている木曜ランナーズの代表である内野さんから、視覚障害者と子どもたちもたすきリレーに参加できないかとの打診をいただいたのです。しかしたすきリレーは公道を走るため、段差も多く危険であることから、昨年は見合わせていたのです。しかしぜひ参加していただこうと遠藤さんが総合公園内のコースを考え、しかも毎年平塚市社会福祉協議会イベント実行

委員会が行っている福祉フェスティバルのプログラムに第3区の走行を組み入れる形で設定されたのです。たすきリレーを各地域の啓発活動に組み入れてもらうのは、実行委員会が常に願っていることの一つです。これまでも湘南コースの永野小学校、都心コースの品川児童相談所など、中継点のある地域や機関のいくつかが、たすきリレーを通して子ども虐待防止の啓発活動を主体的、積極的に行ってきました。今回の平塚市社会福祉協議会の企画は、規模も大きく、かつ障害を抱えた子どもたちが多数参加できることを可能にした点で、極めて優れたアイデアであり、全ての実行委員が感激した企画でした。走るランナーも多彩となりました。300人以上のランナーが集まったのですが、児童福祉施設職員、児童相談所職員、市役所職員、教員、消防士、医師、企業の方、米軍の方など児童福祉の領域を越えて多岐に及びます。それぞれのランナーは、おそらく日常生活のどこかでたすきリレーを話題にするでしょう。それぞれの領域の中でこの話題が少しずつ広がれば、いつかはきっと大きな啓発の輪になると思います。時間はかかるかもしれませんが、こうした広がりには、一瞬で消える一方的な呼びかけよりも、手ごたえのある確かなものと思うのです。ゴール会場のブースも増えました。「祈りの『Friendship』キルトたすき製作」のブースをはじめとして、「子どもシェルター・てんぼ」「全国児童家庭支援センター協議会」「セブンイレブン」「横浜市民生児童委員による綿あめ」のブースなどが新たに加わりました。当日は全てのブースが並び、虐待防止活動の紹介や親子が楽しんでもらえるような企画を展開していました。またプロのデザイナーである

こくぶともみさんが、たすきリレーのイメージのイラストを多数展示されました。ステージ上では午前10時から、歌ありパントマイムありの様々なショウが展開されました。また会場内では学生による着ぐるみのキャラクターが子どもたちと戯れ、大道芸師が得意の技を見せて回り、ボランティアの方々が手作りのリボンを配布するなど、始めたころと比べて随分と華やいだものになりました。ブースやイベントなど、多分野の方々が構成されていることによって、会場の雰囲気にも多様さと奥行きが生まれることを再認識しました。

5. 思いの込められたたすきのリレー

今年のたすきリレーは10月30日の日曜日に行われました。昨年同様、児童虐待防止推進月間である11月に入る直前のこけら落とし的な意味も込めてこの日となりました。1週間前には小山市でたすきリレーが行われ、そのたすきを受け取りました。また前日には滋賀県でたすきリレーが行われ、都心コースで毎年全区を走られている井上さんが参加し、滋賀県のたすき引き継いでこられました。また岩手県では、被災した方々がニット製の手作りのたすきをたくさん作られました。復興への思いの込められたたすきです。身に着けるランナーは気持ちがいまる思いがしたでしょう。渋谷駅前のハチ公像前からスタートを切る都心コースは、日本子ども総合研究所、東京タワー、泉岳寺、品川児童相談所、大田区大森スポーツセンター、川崎市役所、セブンイレブン浦島町店そしてゴールである横浜山下公園へとたすきをつなぎ、神奈川県二宮町にある心泉学園からの湘南コースは、エリザベスサンダースホーム、平塚市総合公園平塚のはらっぱ、セブンイレブンサザンビーチ店、茅ヶ崎ファーム、遊行寺、西横浜国際総合病院、永野小学校、山下公園へとたすきをつなげます。当日の朝は良く晴れた青空でした。3コースは予定通りスタートセレモニーが行われました。スタートセレモニーと一口で言っても、その趣は3コースで異なるものでした。都心コースのスタート地のハチ公像前には、渋谷駅前でもあり多くの方々が集まりました。昨年同様ハチ公像にたすきをかけ、大きな声援に包まれる中でスタートしました。湘南コースのスタートは児童養護施設である心泉学園です。そこには坂本二宮町長をはじめとする地域の方々と施設の子どもたちが集まり、温かい雰囲気の中で、子どもたちの声援を受けてのスタートでした。高德院では、松尾市長の挨拶の後、大仏を前にしての佐藤住職の祈りの込められた挨拶の後、厳かな気の引き締まる空気の中でランナー全員は大仏様に手を合わせスタートしました。それぞれの第1区のランナーは多彩でした。鎌倉・三浦コースの第1区は、松尾鎌倉市長をはじめ、市役所職員、児童相談所職員、施設職員、市役所職員、格闘家、郵便局職員、企業の方などで構成されています。都心コースは、児童相談所、施設職員、NPOの方、企業の方などです。湘南コースは、学校教諭、施設職員、消防所職員、役場職員等、実に30名のランナーが走りました。1区十数名で走ることとなっているため、二グループに分かれての走行となりました。第1区のみならず、ランナーの希望者はこれまでで最大数でした。ランナーの呼びかけから2週間ほどで各区のランナー定員が一杯になったのです。

6. 感動のゴールと全国に広がるたすきの輪

朝の青空も正午には曇り空に変わり、2時過ぎには小雨が降りだしました。ただ走り始めたランナーには全く関係がありません。ひたすら笑顔でゴールに向かって走っています。3時半過ぎ、いよいよゴールの時を迎えました。気づくと雨は上がっています。ランナーを迎えるために天気も歓

迎してくれているようです。3コースのランナーはタイムスケジュールを大きく外れることなく、山下公園の入り口に入りました。山下公園は海に面して横に長い公園です。最後は3つのコースが3列に進んで一緒にゴールをします。ランナーを迎え入れる山下公園ですが、この山下公園も震災と深い関係があります。この公園は1923年9月1日に起きた関東大震災の復興事業のひとつとして震災による瓦礫を埋め立てて造成された公園なのです。関東大震災は東京のみならず横浜にも壊滅的な被害をもたらしました。その後復興の象徴として瓦礫や焼土を埋め立てて山下公園を造成することになったのです。そして日本で最初の臨海公園として1930年（昭和5年）に開園したのです。それから五年後の1935年（昭和10年）には震災からの復興を祝う復興博覧会がこの公園で盛大に行われたといえます。今回のたすきリレーと震災復興に何かの縁を感じずにはいられませんでした。3時40分、ステージのあるメイン会場からランナーたちの姿が見えてきました。皆笑顔です。それぞれのコースを走った3つの隊列と一緒にこちらに向かってくる光景は壮観です。ランナーの数が増えたことで、Tシャツの白色とたすきのオレンジがひときわ輝きます。ランナーの隊列は、最後に大きな一つのかたまりとなって、一斉にゴールテープを切りました。誰もがさわやかな笑顔です。皆のたすきに書かれた「子どもに明るい未来を」のメッセージが素直に心に響きました。このわれわれのたすきと、小山からのたすき、滋賀県のたすき、そして岩手県の方々の手作りのニットのたすきは、岐阜県のたすきリレー実行委員会に引き継がれました。たすきは全国の各地でつなぐられ、来年は再びこの地を駆け抜けます。たすきリレーは、ランナーがたすきをつなぐだけでなく、これに携わっていただくことで多くの方々がつながっていく実感があります。それは子ども虐待防止と子どもの笑顔を願う心のたすきと言っていいのかもしれませんが。心のたすきは次々とつなぐられ、やがては大きな心の輪となると信じています。大会のフィナーレで皆が歌う「翼をください」を聴きながら、そんなことを思いました。一般市民も専門家も関係なく、分野や立場がどうであれ、子どもの明るい未来を望む心は一つなのです。

謝辞

まず、たすきを身につけて走っていただいたランナーの皆さまとキャンペーン会場で歌やトークをしていただきました皆様に感謝申し上げます。

次の方々には財政面での支援をしていただきました。NPO 法人児童虐待防止全国ネットワーク、資生堂社会福祉事業財団、NPO 法人エキスパート・チャリティ・アソシエーション、(財) 神奈川新聞厚生文化事業団、(株) ガリバー、サッポロ飲料(株)、セブンイレブン、ユースキン製薬(株)、日本アムウェイ合同会社、東京キワニスクラブ、横浜キワニスクラブ、用賀山崎鋳金、カードショップカリントウ、星野司法書士合同事務所、湘南信用金庫、神奈川県保険医協会、神奈川県生命保険協会、用賀おたふく。心より感謝申し上げます。また、子どもの虹情報研修センターで行われる研修期間中に募金をお願いしたところ多くの方々協力をしてくださいました。ありがとうございました。

次にあげさせていただく後援の機関、団体の方々からは、大きなご支援をいただきました。厚生労働省、東京都、神奈川県、神奈川県警察、横浜市こども青少年局、川崎市、鎌倉市、渋谷区、大田区、逗子市、横須賀市、茅ヶ崎市、小山市、神奈川県社会福祉協議会、全国児童相談所長会、神奈川県児童福祉施設協議会、神奈川県母子生活支援施設協議会、神奈川県保険医協会、神奈川県教育委員会、東京都社会福祉協議会、横須賀市児童相談所、横浜市ファミリ

一ホーム連絡協議会、川崎市あゆみの会、(財)神奈川新聞厚生文化事業団、(株)資生堂、鎌倉高德院、渋谷忠犬ハチ公銅像維持会、アン基金プロジェクト、東京キワニスクラブ、横浜キワニスクラブ、彩樹園、鎌倉力車株式会社ブラネス。大変ありがとうございました。

スタートや中継所等の設定にご協力をいただいた渋谷忠犬ハチ公銅像維持会、鎌倉高德院、鶴岡八幡宮、逗子市役所、心泉学園、東京タワー、横浜市立永野小学校、セブンイレブン横浜片吹店、セブンイレブン浦島町店、セブンイレブンサザンビーチ店、平塚市社会福祉協議会、泉岳寺、遊行寺、西横浜国際総合病院、関東学院大学大学祭実行委員会、神奈川県障害者スポーツ振興協議会、伊勢佐木町1・2丁目地区商店街振興組合、協同組合伊勢佐木町商店街、エリザベスサンダースホーム、茅ヶ崎ファーム、日本子ども家庭総合研究所、川崎市役所、横須賀市役所、品川児童相談所、大田区大森スポーツセンター、横浜市中心児童相談所に心から感謝申し上げます。

キャンペーン会場でブースを設置していただくなど会場を盛り上げていただきました神奈川県、おおいそ学園、資生堂社会福祉事業財団、セブンイレブン、全国児童家庭支援センター協議会、横浜市、川崎市あゆみの会、カンガルーOYAMA、CROP、神奈川県母子生活支援施設協議会、特定非営利活動法人子どもセンターてんぼ、栗原さんをはじめとするパトマイマーの皆様、原宿ライブハウス・ジェットロボット、こくぶともみさん、幸保エバーグリーンズ、成田圭さん、坂本博之さん、土田聡子さん、甲州戦記サクライザーの皆様、朗読劇「ハッピーバースデー」2011 横浜公演実行委員会、(株)閃利、岩手県ハート・ニットプロジェクトに感謝いたします。またご寄付をいただいた方々このイベントにご支援ご協力をいただいた方々に深く感謝いたします。

さらに次にあげさせていただく方々には、キャンペーン会場でリボンやチラシを配るなどのボランティア活動をしていただきました。横浜キワニスクラブ、渋谷区子ども家庭支援センター、永谷連合町内会、品川区民生・児童委員、東京都社会福祉協議会児童部会従事者会、戸塚区民生・児童委員、関東学院大学、明治大学など学生の皆さま。心より感謝申し上げます。

オレンジリボン作成にご協力いただいた、港南区社会福祉協議会、下永谷地区民生委員、川崎市あゆみの会、横浜キワニスクラブ、エキスパート・チャリティ・アソシエーション、日本アムウェイ合同会社、日本子ども総合研究所、鎌倉児童ホーム、CROP、専門学校・大学生、有志ボランティアの方、心より感謝申し上げます。

そして、今回始まった新プロジェクト「祈りの『Friendship』キルトたすき」の製作では、キルト作家若山雅子さんをアドバイザーに、勝山泰江さん、荒井美夏さんとその仲間たちにご尽力いただきました。心より感謝申し上げます。

平成 23 年度
第 5 回子ども虐待防止オレンジリボンたすきりレー実施報告書

平成 24 年 1 月 31 日発行

発行・編集 子ども虐待防止オレンジリボンたすきりレー実行委員会

〒245-0062 横浜市戸塚区汲沢町 983 番地

子どもの虹情報研修センター内

TEL 045-871-8011

FAX 045-871-8091

Mail : info@crc-japan.net

URL <http://orange-tasuki.org/>